我が家は里からやや離れた山懐にある。だから、どうせ軽トラで登ってくるのだろうと思っていたら、何と真っ赤な消防車が赤ランプを明滅させ、派手にカンカンと警告音を鳴らしながらやってきたのでびっくりした。

訊けば、「ここらにはクマがいるそうなので怖いから」という。

数年前に新聞の購読を始めたとき、小淵沢にある新聞店が、朝刊を我が家まで届けにこられないというから、仕方なく、少し下ったところにあるペンション前に、新聞専用のポストを作ったのだけど、その理由も「配達員がクマに襲われるかもしれない」だった。

思い起こせば、我が家の近くにかつて張られていた〈クマ出没注意〉看板。そこに描かれていた獰猛そうなクマのイラスト、あれはどうみてもツキノワグマではなく、ヒグマか、あるいはグリズリーの顔だった。

おそらく、実際にツキノワグマを見たことがない人が、イメージで描いたのだろうが、そうした無知が世間一般の恐怖を無駄にあおり、我が家の周囲の山には背丈二メートル以上の凶暴なクマがいると本気で信じ込んでいる人が、実は少なくない。

そもそも、〈クマ出没注意〉なんて書かれても、例の路上の〈落石注意〉看板と同じく、何をどうすればいいのかわからない（最近までぼくは、あれを〝ハンドルを巧みに切って、落ちてくる石をひょいひょいと避けろ〟ということだと思っていた）。

だから、我が野生鳥獣保全管理ボランティア〈やえんぼう倶楽部〉としては、軽井沢にあるクマ対策チーム〈ピッキオ〉の看板にならって、とくに許可をとり、「さわがず、走らず、あとずさり」というコピーをメインに、クマと遭遇したときの対処法を箇条書きでわかりやすく書いたものを、あちこちに張ってもらうようにした。

クマはたしかに怖い。しかし、だからといって、ただただ畏れて距離を隔てているだけでは、人はますます動物に対して無知になり、その結果、よけいな災厄を招く。山里に暮らすかぎり、やはり周囲に棲む彼らのことを常識として知っておかねばならない。

ところが、地元の人々はいっこうに野生動物のことを知ろうともせずに、たんに怖いというイメージで遠巻きに見たり、田畑を荒らす〝害獣〟は、皆殺しにして山からいなくなったって、いっこうにかまわないなどという。

一方で、クマを始めとする野生動物を、人がカリカチュアライズしたイメージで可愛いと溺愛するのも、まったくどうかと思う。

ぼくは大昔から動物を擬人化してきたディズニーのアニメーションなどを、それが如何（いか）に名作であろうとも否定してしまう人間なんだけど、まさにバンビ症候群と呼びたくなるような、